

JAPANTEX'99

「インテリアトレンドNOW」展

プロが主張する旬のインテリア「私のお薦め空間」



真木 友子

武蔵野美術大学卒業

'93年からインテリア、アパレル関係のテキスタイルデザインを中心に、フリーで活動。

久しぶりの共同制作で、始めのうちは苦戦しましたが、結果的には充実したものができたと思います。

インテリアコーディネーターではなく、テキスタイルデザイナーが提案するというところにこだわった、最初からの考えが、良かったのだと思います。

これから、TDAがどのような活動や発信をしてゆくかで、会員の幅も層も広がるし、周りからの捉えられかたも、変わってくると思います。独自の提案をしてゆくことで、協会の価値が変わってゆくのだと、今回特に感じたことです。



都築 恵子

武蔵野美術大学卒業

(株)ゼロファーストデザインにてテキスタイルデザイナーとして勤務。

ジャパンテックスの企画ブースである「私のお薦め空間」というイベントに日本テキスタイル協会の一員として参加した。

この経験を通して私なりに感じた事を下記に述べてみたいと思う。

■コンセプトについて

「安らぎの空間」をテーマに私達は世代の差、個々の感性の違いにより様々な意見を交した。話し合いを重ねるごとに内容を絞り込み、最終的に人々の求める“安らぎ”を“五感に心地よく訴える”ものとして捉えた。そして、そのテーマをより明確にするために、装飾性を排したシンプルな空間を設定した。

“日常生活にないクッション使い”“透過性のあるボイルで空間を仕切る”など、空間を構成するエレメントとして、現在のインテリアファブリックスの求められている様々な可能性を引き出す事ができ、TDAらしい“安らぎの空間”を創ることが出来たと思う。

■展示会場について

アトリウムという立体的な“場”をより有効に利用できる空間構成が考えられたのではないかと考えた。
(上部2・3階からの視線あるいは、四方からの視線を考慮したレイアウトなど…)

また、今回の展示は受付の裏手にレイアウトされた事もあり、非常に閉鎖的な会場構成になってしまったことが残念であった。

■ディスプレイについて

他のブースは比較的インテリアエレメントとしての“モノ”を演出していたように思う。それに対し、あえて家具を用いず、空間そのものをデザインし、ディスプレイしたためコンセプトの独自性をアピールできたと思う。

ディテールとしては白でまとめた壁面にスリットを入れることで、視覚的効果を生み、空間としての奥行き、広がりを演出した。硬質なフレームとしての空間に柔らかいクッションを用いてプールを造り、壁面にはドット状にミニクッションを並べ、遊び心のある演出を行った。

そして、音や水を連想させる映像を映し出す事で、“五感”に安らぎを与え、様々なイメージを引き出せる空間を創造することが出来たと思う。

■この経験を通して

空間を創ることに対し、経験不足であったため当初は手探り状態であったが、そのことがかえって個々の能力を引き出しつつ、充実した討論ができた。そしてグループとしての団結を生み出したと思う。また、当日は予想以上に順調なスケジュールでディスプレイを行うことが出来たのも、すり合せが十分されていたためであろう。

日常の仕事から離れ、このような経験を通して様々な人とのコラボ

レーションは非常に有意義であった。今後も色々な形でこの経験を生かし、新しい発信をしていきたいと思った。



内田 滋

多摩美術大学卒業

(株)森傳のデザイン部にテキスタイルデザイナーとして勤務。

シンブルを基本として、住空間におけるファブリックスの演出を、沢山のクッションを使用したり、透過する布を間仕切りにしたりして、「人を柔らかく包み込み安らぎを与える空間」を意図した。糸使いや織の組織に特徴がある布地や、緻密感のある光沢タイプからボリュームのある毛皮タイプの布地まで、さまざまなファブリックスを白に近い布地で統一させたことによって、多様な布地の表情があることを見ていただいた方に、分かりやすくアピール出来たのではないかと思います。

今回の企画で一番難しかった事は、TDAとしてファブリックスを使った住空間演出とは、どういうものかということでした。

各者より忙しい最中、沢山のアイデアが提案され議論されてまとめ上がっていき、一つの形になったことが、個人的には意義があった事だと思っています。



古関 崇尚

多摩美術大学大学院卒業

フリーのテキスタイルデザイナー。

“KOSEKI DESIGN STUDIO”代表。

今回、参加してみて、普段からあまり仕事で知り合えない人たちと一緒に展示の製作をしていく過程を通し、深く知り合えたことが一番の収穫だと思います。TDAにいるメリットの中で一番大事なことに業界の中での横や縦への人との繋がりということがあると思うのですが、そういった意味では大変に貴重な経験をさせていただいたと思います。欲を言えばさらに多くの人との繋がりがあればいいと思います。他の機会にも多くの人の参加を期待したいと思います。特に今回参加の少なかった企業に勤める若いデザイナーのTDAへの参加を期待したいと思います。企業の方にもそのような人材をTDAの集まりにどしどし出していく余裕があるよう願っています。



中島 良弘

武蔵野美術大学大学院卒業

現在、フリーのテキスタイルデザイナー。

“CLOTH OVER DESIGN”代表。

今回のJAPANTEX'99におけるTDA企画展は（自分で言うのもなんだが）わりと評判が良かったようである。

その大きな要因の一つは、7人の侍ならぬ、7人の若手（と呼ばれる？）デザイナーがそれぞれ同じテキスタイルデザインという分野にいながら、異なった感性を持ち、その感性をぶつけあい昇華していった、ということにある。

それぞれが会社も仕事の内容も異なり、ましてやインテリアに対する嗜好、考え方も異なる。時には意見がまとまらず、打合わせの段階で、何時間も平行線をたどったことは一度や二度ではない。7人全員のイメージを完全に満たすことなどできない。しかし、度重なる打合わせの中で“くつろげる空間”という抽象的なイメージの“ある一点”で、ある程度全員が納得して、これならいける、という共通の空間イメージを探り当てることができたことが大きい。

（“ある一点”とは“プール”という言葉である、と私は認識している。）そのおかげで、あとはみんなのイメージが一つのイメージに形成されるのにそれほど時間はかからなかった。

もう一点は、今回の展示テーマは「私のお薦め空間」ということであつたが、正直なところ7人のメンバーは、テキスタイルデザインが専門であつて、インテリアコーディネーターが専門ではなかつたということである。（少なくとも私は素人です。）